

2024年 12月8日(日) 関東学院教会 アドヴェント第二主日礼拝 説教要約

説教「神によって新しく生まれる」 ヨハネによる福音書 1章10-13節 高橋彰牧師

言が肉となった

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

ヨハネ1章1-18節は「言(ロゴス)賛歌」と呼ばれますが、どうやら元にあった詩文をイエス・キリスト(17節)のストーリーを証言するものとして用いるためにいくらかの文言を補足して挿入したのではないかと考えられています。11-13節も議論のある箇所です。11節の「言は自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」は「最も短いイエス伝」とも言われます。そしてヨハネ福音書のあらすじを簡潔に表した、まるで本の帯文のようなフレーズです。神の言であり、御子であるイエスはこの世にられました。それは「ご自分の民」、神の選びの民、神の約束と救いを実現されるために特別にするしとなると自負していたユダヤの民のもとに、ユダヤ人の一人としてお生まれになりました。しかし、そのユダヤの民に属する者たちこそが、イエスを拒絶しました。「認めなかった」(10)は「知らない」という言葉ですが、単純に無知というだけでなく「知らない」と言い張り否定する、強い拒絶を現わす意味を持っています。人びとの「知らない」という拒否が、イエスを会堂から追放し、社会から見捨て、十字架へと追いやりました。イエスはこの世の中でそのように「知らない」と拒絶される人びとと歩みを共にされています。そして、イエスを「知っている」「知ろうとする」人は「受け入れる者」であり「信じる(信頼する)」者であるとし、神の子となる資格(エクスキシア)を与えたと言います。権威、権利とも訳されるこの言葉が使われているのは、特権を振りかざしてイエスを拒絶した者たちがこだわったような「権威」や「資格」とは異なり、まさに人としてのいのちの権利、尊厳が回復されると説明するのが最もふさわしいと思います。それは血筋でもなく、人びとの行為や決断でもなく、「神によって生まれる」ことでありました。

「神によって新しく生まれる」とはどのようなことでしょうか。もう一度母の胎に入るなどできない、という問答がヨハネ福音書3章で議員ニコデモが夜にイエスを訪問した時のやり取りとして出てきます。しかし、イエスを信じる者は霊によって新たに生まれるとイエスは言いました。イエスを信じ、イエスと共に生きる者はイエスの内にある新しい「命」を共に得るのです。

「命」(4)は「ゾーエー」という言葉です。永遠の命を現わす言葉とも言われます。この世の生計、具体的な生をあらわす「ビオス」という言葉と対比的に用いられます。

ルカによる福音書15章にある「放蕩息子のたとえ」ではこの「ゾーエー」と「ビオス」が特徴的に用いられます。「財産」と訳されたビオスを欲して、弟息子は父からそれを受け、父や故郷から自分を切り離すように家を出ていきます。しかし、そのような自由を得て生きた弟息子の人生は、自らの放蕩や災害で失敗し、危機に陥ります。誰も助ける者がいなかったとあります。そんな時に思い出したのが、父とその家、自分がいた場所であり、そこが自分にとって生きることを肯定し、共に生きようとしてくれる人びとがいてくれる場所、自分が生きられる場所でした。彼は雇い人の一人になってでもその場所へ戻って生き直したいと切望しました。遠くから見つけた父は走りより、抱きしめて言いました。

「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」(ルカ15:24)

愛あるところに、わたしたちの命がある。愛の源である神との関係を回復し、共にあろうとする者たちは、血によって、肉によって、人間の決定によってではなく、神によって「神の子」として生きる」と、聖書は告げています。神があなたを命へと招いています。